



OSAKA UNIVERSITY

阪大

NEWS LETTER

45
No. 1
2009
Autumn

クールでかっこいい 「大阪の街」 発見。

◎総長カフェ 21世紀懐徳堂ライブ
建島 哲 / 鷲田清一 — 1

◎インタビュー — 岸本忠三・平野俊夫 — 5
「クラフォード賞」受賞
インターロイキン6の発見から治療薬開発へ
基礎と臨床をつなぐ免疫学研究の伝統

◎産学連携 — 節原裕 — 7
大面積・低ダメージ・高密度プラズマの生成・制御
シリコン薄膜形成、プラズマナノプロセスの新地平を開く

OB訪問 — 村本洋子・村本歯科医院院長 — 9

元気です！在學生 — 岩井真紀・文学部4年生 — 10

健康 — 中年期は危険な時？それとも…？ — 石金直美 — 11

文学・芸術の今を語る — ドイツ/チェコの国境を越える文学研究 — 三谷研爾 — 12

平成21年度日本学術振興会採択事業 — 13

平成21年度グローバルCOEプログラムに採択 — 石黒 浩
国際化拠点整備事業（グローバル30）採択

阪大ニュース — 14

「多様性の街」のアートを語る

● 国立国際美術館館長 — 建島 哲 — Akira Tatehata

● 大阪大学総長 — 鷺田清一 — Kiyokazu Washida

クールでかつこい 大阪の街 発見。

サントリーミュージアム「天保山」が来年末に休館する。アートを取り巻く状況は厳しいが、大阪の街とアートをめぐる二人の話からは、どこか希望が感じられる。非日常に通じる美術館は、何でもありのメルティング・ポット(るつぽ)だという。「クールでかつこい」大阪の街を歩こう。そして、とっておきの街や風景を発見しよう。



中之島サンセットの魅力

鷺田 建島さんは国立国際美術館の館長に就任後、大阪の街にお住まいになり、美術館まで自転車で通っていらっしやるそうですね。

建島 派手なロードレーサーに乗っていたのですが、最近は歩いているんですよ。というのは、自転車は快適でスピードが出すぎるからか、ものを考えるリズムと合わないのです。歩いているとアイデアや妄想がわいてきて、不

思議にいろんなことを思いつきます。言葉があふれてきたときには、急ぎよ

近くの喫茶店に飛び込んで、コースターの裏に文字を書きつけたりしています。

鷺田 哲学者は昔から、歩いて思索してきたものです。歩きながら哲学を講じたアリストテレス、それにカントの規則正しい散歩が有名です。歩いてごらんになって、大阪の街の印象はいかがですか。

建島 この美術館が千里万博公園にあったころ15年間ほど勤めましたから、

大阪のことはよく知っているつもりだったのです。ところが、4年前に東

京から大阪の街の真ん中へ越してきたら、予想外の大阪に出会いました。それはクールでかつこい大阪です。私の住んでいる新町から鞆公園を過ぎ、

土佐堀川を越えて中之島に通っているわけですが、もとは淀川の本流だったという二つの運河に囲まれた中之島界隈の夕暮れ時の魅力は格別です。思わず歩みを止めて陶然としてしまいます。西の方には夕日が沈む、うら寂しい光

景。反対側には超高層ビル群。運河の水面に水都の街並みが反射して、本当にすてきな街だなと思います。

道頓堀の文化や全国ブランドになった吉本の芸能も大阪の重要な側面ですが、それだけじゃない。上町台地もあれば鶴橋もある。ベイエリアにも小野十三郎の詩の荒涼としたイメージ、上田正樹の歌「悲しい色やね」に出てくる寂しいイメージもある。何より僕にとっては、中之島界隈のちよつとクールな魅力は大発見でした。

ブルジョアの文化支援

鷺田 大阪にはモダニズムの都市の面があります。明治以降、大阪は産業的にも文化的にも日本のモダニズムの牽引車でした。産業と流通と新聞ジャーナリズムです。上方では江戸時代から町衆の自治文化が定着し熟成していたから、明治以降モダニズムへと自然に移行できたように思うのです。

建島 それは別の言い方をすると、ブルジョア階級がしっかりしている町ということになります。大阪は空襲に遭いましたが、今も名建築といわれる近代建築がかなり残っています。中央公会堂をはじめ、綿業会館、中之島図書館、天王寺の大阪市立美術館など。中之島には、僕がいちばん好きな大阪府立東洋陶磁美術館があります。ここは世界第一級の東洋陶磁の宝庫「安宅コレクション」を建築費ごと、住友グループの企業が寄贈して設立されました。まさしく大ブルジョアの偉業ですね。

歩いているとアイデアや妄想がわいてきて、不思議にいろんなことを思いつきます。



●鷺田清一(わしだ きよかず)
1949年京都府生まれ。大阪大学文学部教授、文学研究科長、理事・副学長を経て、2007年8月に大阪大学総長就任。専門は臨床哲学、倫理学。

この世の外へ、非日常への通路が全然ないところで、場末や巨樹古木、宗教施設の代わりにするとしたら、アートしかない。
都市におけるアートの役割は、ものすごく大きいと思うのです。(鷺田)

鷺田 大阪の主要な文化施設は寄付でできています。そもそも大阪大学がそうなんです。旧帝国大学を大阪につくる際、当時の大阪の政財界が協力して陳情活動を行い、土地や建設費、当座の大学の運営費の大半を府と民間が寄付してくださった。だから帝大といっても、実は半官半民の大学です。阪大の外国語学部になっている旧大阪外国語大学の前身、大阪外国語学校も、林蝶子という一人のビジネスウーマンによる土地の寄付で創設されました。

戦後のある時期から、大阪は「がめつい「けち」というイメージがつきまとうようになりましたが、歴史をひもとくと大阪ほど寄付文化が成熟した町代から商人が行政に携わり、大事なことはお上には任さんという心ばえがうかがわれます。松下幸之助や佐治敬三なども、ブルジョアが文化を支えるという伝統を受け継いでいます。



建昌 われわれもその恩恵にあずかっでいて、ダイキン工業現代美術振興財団(井上礼之理事長というサポート財団を作っていた)だいた。全国の国立美術館5館のうち、民間が財団を設置しているのは当館だけです。しかもダイ

キン工業は、財団をサポートしても口は出さない。実にありがたく感謝するしかありません。

多数のアーティストを輩出

鷺田 モダンでかつこいひのは近代建築だけでなく、美術では小出栖重や佐伯祐三らが大阪から出ています。

建昌 モダニズムの絵画の伝統は、戦後にもつながっていて、阪神間で結成された具体美術協会は、吉原治良を中心とする前衛絵画の大きな流れを生み出しました。吉原さんは大阪の油問屋の息子で、後に吉原製油の社長業のかたわら抽象画を描き続けました。

また、戦後の日本のグラフィックアートで国際的に高く評価されている人の多くが関西出身です。例えば早川良雄、田中一光、永井一正、横尾忠則、黒田征太郎など。ただ、ある時期から

東京に移ってしまいました。今も優れたアーティストがたくさん住んでいて、国際的に文化を発信しているのに、肝心の大阪の人たちが文化の町だと思っていないのがちよつと残念ですね。

鷺田 近松の人形浄瑠璃や語りの伝統は連綿と続いていて、パフォーマンスアートも頑張っています。

建昌 大阪の文化に対して、僕はわりと楽観的です。大衆的な基盤やブルジョア的な基盤が息づいているから、面白いものが出てくるんじゃないかな。ミラノのように、ファッションの町として育っていったらいいなとも思います。

鷺田 大阪のファッションで面白いのは、男性ファッション。水色や黄色のスーツを着て、それで出勤するの?というような人が朝の地下鉄から出てくるし、環状線にはすごい派手な服を着たお年寄りが乗っていたり。お仕着せでスタイルをあてがわれるとカチンとくる、流行に合わせるより私のテイストでいく、という強さが大阪のファッションにはあるような感じがします。

建昌 若者たちは流行に敏感だけれど、ある意味で一元化されています。大阪にはそういうのと距離を置いた自由さ



大阪はまさしくダイバーシティ、
多様性の街という気がします。
僕は社会の多様性ということがすごく大事だと思うのです。(建畠)

アートは非日常的な 祝祭空間

があるから、非常にユニークなファッションが根付くのではないのでしょうか。鷺田 私も大阪で30年以上仕事をしているうちに、建畠さんと同じように大阪の見え方が変わりました。大阪にはスタンダードあるいはユニバーサルなところが、複数あります。キタとミナミ、中之島、鶴橋、上町など。東京は消費文化の中心地として、街を消費している、街が消費されているという感じがするのです。どこそこの街がかっこいいとなると強烈な風が吹いて、昔だったら銀座、その次は六本木、ある時期から新宿や渋谷、池袋などと、街が消費の対象になり、時代とともに漂流しているような……。

建畠 それが一番端を行く東京の強さではあるんだけど、大阪はまさしくダイバーシティ、多様性の街という気がします。僕は社会の多様性ということがすごく大事だと思うのです。

●建畠 哲(たてはた あきら)
1947年京都府生まれ。早稲田大学文学部仏文学科卒業。国立国際美術館主任研究官、多摩美術大学教授を経て、2005年から国立国際美術館館長。90年と93年にヴェネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、横浜トリエンナーレ2001のアーティストック・ディレクター、あいちトリエンナーレ2010芸術監督などを務める。詩人、美術評論家としても活躍し、『余白のランナー』(歴程新鋭賞受賞)、『零度の犬』(高見順賞受賞)などの詩集のほか、『問いなき回答』、『ダブリンの緑』など多数の著書がある。

鷺田 成熟した都市の面白さは、都市文化の外への出口がいっぱいあったことです。例えば場末があるとか、宗教施設があるとか、何百年も前からある樹木とか。そこではこの世の価値観でものを考えず、この世界を背面から、あるいは彼岸から見、悠久の時間のなかでとらえる。そのきっかけを与えるもの、つまり、この世の外への通路みたいなものが街中にある。今のニュータウンには、そういうものは一切ない。この世の外へ、非日常への通路が全然ないところで、場末や巨樹古木、宗教施設の代わりをしたら、アートしかない。都市におけるアートの役割は、ものすごく大きいと思うのです。

建畠 確かに、アートは非日常的な空間を喚起できる、平和的な手段で祝祭が起こせる。アーティストが市民社会の中で共存していることがいいのです。隣近所に公序良俗になじまない人がいても、ちよつと顔をしかめることがあっても、実は面白い人で心が優しかったりする。統一された価値観を持った人



たちが効率よく暮らしている社会に比べたら、はるかに健全です。非効率な社会ではあっても、その非効率性は社会の健全なバランスを保つのに必要だと思えます、その意味では街の美術館も、一歩入れば日常と違った空間が広がっています。

美術館は メルティンク・ポット

鷺田 今の国際美術館は、館内で演劇や音楽、カフェ的な催しなど、彫刻展や絵画展にとどまらない活動を行っています。アートと違うものを媒介する役割を美術館が果たそうとしていて、隣にいる私はメルティンク・ポットみたいなイメージで見えています。アートとサイエンスを代表する美術館と大学とが連携し、教育の中でアートをうまく媒介していく試みもあり得るのではないかと考えています。

建畠 メルティンク・ポットと形容してもらったのは、とてもうれしいことです。美術館はホワイトキューブの展示室の聖域を頑迷固陋に守っていくべきだという使命があるとともに、その一方で何でもありだと思っています。盛この施設自体がメディアであると。盛

大に展覧会をやると同時に、発信できるものはすべて発信していこうと。文化施設が専門化し細分化し高度化していく半面、ジャンルが分断されて囲い込まれ、何か可能性を失っていくのではないかと。専門家こそ、デヴィッド・ボウイの映画のタイトルを借りれば「アソリユート・ピギナーズ」として、挑発的でありたいのです。

大学と美術館のコラボレーション、相互乗り入れみたいなことも、メルティンク・ポットの拡大バージョンになるといいですね。

鷺田 学生たちは学外に出て仕事を体験するインターンシップに、熱心に取り組んでいます。ただ、きちつと組まれたプログラムのつとつて、第二の学校的なものになりがちです。そうではなくて、創作現場でプロのお手伝いをさせてもらい、何も形のないところから何かを作り上げて、後始末までするプロセスのすべてを体験すること。音楽会なら最初から最後まで、受け付けも打ち上げも経験すること。まさにアソリユート・ピギナーズのアートの経験は、大きな意味があるように思います。

建畠 大学も美術館も今までの固定的なシステムではなく、周辺部を柔軟にして、いろいろ新しいことに挑戦しなければなりません。それが成功すれば、静かに全体を変えていくこともありえます。

鷺田 隣人としてまた相談に参りますので、よろしくお願ひいたします。

「クラフォード賞」受賞

インターロイキン6の発見から治療薬開発へ

基礎と臨床をつなぐ免疫学研究の伝統

生命機能研究科の岸本忠三教授と医学系研究科長の平野俊夫教授が、ノーベル賞の科学分野を選考していることで知られるスウェーデン王立科学アカデミーが表彰するクラフォード賞を受賞。5月11～13日の3日間、ストックホルムとルンドで授賞式や学術講演会などが開催された。地道な基礎研究が画期的な発見と治療薬開発に至った軌跡を語ってもらった。



●生命機能研究科 教授
岸本 忠三 — Tadimitsu Kishimoto

1969年大阪大学大学院医学研究科修了。大阪大学医学部教授、同細胞工学センター教授、医学部長、総長などを歴任。現在、同大学院生命機能研究科教授。朝日賞、恩賜賞・日本学士院賞、ロベルト・コッホゴールドメダルなどを受賞。文化勲章受章。

●基礎研究が治療に役立つことを証明

——まず、一連の研究の発端からインターロイキン6の発見まで。

生体には病原菌やウイルスなどの異物を排除し、たとえ侵入してきても抗体をつくって対抗できる免疫機構が備わっています。病原体を攻撃する抗体はリンパ球の働きによるもので、Bリンパ球が抗体をつくるのにTリンパ球が関与していることが1968年になって分かりました。Tリンパ球からの指令をBリンパ球に伝えているものの正体を探っていつて発見したのが、後にインターロイキン6と呼ばれる情報伝達物質です。

70年代前半から80年代にかけて、われわれはこの物質を追いかけて続けた結果、86年にこの物質だけを取り出して遺伝子配列を決定づけることができました。当時、私は生命機能研究科の前身の細胞工学センターの教授で、共同研究の陣頭指揮にあたっていたのが一

緒にクラフォード賞を受賞した平野俊夫助教教授でした。

——その後もインターロイキン6のいろんな作用が解明され、医薬品の開発につながりました。

インターロイキン6は情報伝達物質としての働き以外にも、炎症性疾患の病態にかかわっていることが分かってきました。発熱や炎症を引き起こし、病原体から体を守るとともに、過剰な分泌がリウマチの症状を進行させ、骨を破壊したりするのです。

この情報伝達をうまくブロックすることによって病気の進行を食い止めるのが、われわれの開発したインターロイキン6受容体阻害薬です。既に関節リウマチ、体内のリンパ節が腫れ上がるキヤッスルマン病、若年性特発性関節炎の治療薬として認可されています。世界中で100人に1人が関節リウマチに苦しんでいるといわれていますが、

この薬ができて治療法が根本から変わりました。劇的に症状が改善する薬を世に送り出し、多くの人の役に立てたことが、医学研究者としての誇りであり喜びです。

——基礎研究が臨床に生かされ、画期的な治療薬につながった、まさにドラマチックなストーリーですね。

日本では基礎的な研究で突出したものがあっても、薬の開発につながることとは少ない。なぜかという点、基礎的な研究をする集団と臨床の教室との間のコミュニケーションが不十分だから。私自身が内科の教室からスタートして研究者になり、また内科の教授に戻ったという道筋を経ており、研究成果が私と一緒に動いているから一つの発見が治療と創薬につながったのです。

それとともに、「人」が育ちました。細胞工学センターの研究室から出た人たちが全国で活躍していますし、審良静男教授の免疫学フロンティア研究センターには世界中から優秀な研究者が集まっています。「金を残すは下なり、仕事を残すは中なり、人を残すは上なり」と言いますが、いちばん大事なことは研究を受け継ぐ人が残ったことです。

Tリンパ球とBリンパ球の相互作用の研究が最終的に多くの人を助ける抗体医薬の研究に結びついたことは、生命の神秘を明らかにするような基礎的な研究は必ず病気の治療に役立つことを証明したところに大きな意味があるのです。





クラフォード賞は、人工腎臓を発明したホルガー・クラフォードとその妻によって創設された。1982年より毎年、天文学・数学・地球科学、生物学の3分野から1分野ずつ順番に選ばれるが、関節炎分野は画期的な研究成果があった年のみ表彰され、2009年度は関節炎分野からの選出となった。



● 医学研究科長・医学部長
生命機能研究科 教授
平野 俊夫 — Toshiro Hirano

1972年大阪大学医学部卒業。大阪府立羽曳野病院内科を経て、熊本大学助教授、大阪大学助教授、同教授、生命機能研究科長等を歴任。2008年より同大学院医学系研究科長・医学部長。持田記念学術賞、サンド免疫学賞、藤原賞などを受賞。紫綬褒章受章。

● 研究者なら目の前の山を登りきろう

——免疫学研究の道を振り返ってください。

私は医学部卒業後、第三内科の山村雄一教授のもとで1年間の臨床研修を受けました。若いなりに患者さんと一体となつて肺がんや自己免疫疾患と戦いましたが、手ごわい強敵に万策尽き、臨床医学の限界を実感しました。

1973年にボルチモアにあるNIHの研究所に留学し、第三内科の大先輩でジョンズ・ホプキンス大学に留学中の岸本忠三先生とお会いすることができました。

3年後に第三内科に戻り、78年に大阪府立羽曳野病院に内科医として赴任しました。そこで多くの結核性胸膜炎患者を診ることにになり、治療のため1リットル近い胸水を抜くことも多々ありました。胸水1リットルの中には10億個のリンパ球が存在しています。それを結核菌体成分で刺激すると、B



細胞に作用して抗体をつくる強い活性を有する液性因子を産生することが分かったのです。日中は患者さんの治療、夜はこの液性因子の精製を続けました。熊本大学に移ってから、その精製と解析の毎日でした。83年に新設の細胞工学センターの教授になられた岸本先生から、研究を一緒にやらないかと誘っていただきました。

——それからインターロイキン6の発見に突き進んでいったのですね。

いえ、まだまだ先が見えませんでした。84年の12月にN末端の部分的アミノ酸配列の決定に成功したので、これで遺伝子の単離も近いと思ったのに、1年たつても期待した成果はなかったのです。不整脈が頻発し、夜も眠ることができず、研究者の道をあきらめようと思つたほどです。心因性の不整脈であることが分かり、もう一度白紙の心で、精製を全く一からやり直すこと

にしました。

今から思えば、この時は山の頂上直下、息絶え絶えの状態でした。そこに突如、頂上が目の前に出現したのです。1986年5月25日、日曜日の午前11時に研究室に来てみると、三つの異なるプロローブと結合している遺伝子が確認できました。B細胞に作用して抗体を誘導する液性因子、すなわちインターロイキン6の単離に成功した瞬間でした。その日の午後、苦菜を共にした研究者たちと大学近くの喫茶店に集まり、興奮しながら今後の実験計画を立てました。

私たち研究者にとっては、目の前の山を登りきることが重要です。頂上近くが最もしんどい時です。たとえ低い山でも頂上に立つことができた人の目が新しい展望を得ることができ、次に目指すべき高峰が見えてきます。途中で投げ出すようなら、中途半端な研究者にしかたれません。

——これからの研究課題は？
インターロイキン6の異常でなぜ自己免疫疾患が発症するのか、そのメカニズムを解明中です。また、亜鉛が免疫応答における細胞内シグナル伝達分子として作用し、生命活動にどのような役割を担っているかという研究に力を注いでいます。

私は多くの共同研究者と山村先生や岸本先生をはじめとする指導者に恵まれました。「夢見て行い、考えて祈る」という山村先生の言葉を、若い研究者諸君にも伝えたいですね。

新しい発想で技術開発・実用化へ ドン・キホーテのように突き進む

太陽電池や液晶ディスプレイの基板のサイズは、年々大きくなっていきます。大面積化に対応するプラズマ源の新技术について

基板サイズを大きくするのは、コストを下げるためです。1枚の基板で製品が2枚取れるか、4枚あるいは8枚取れるかという違いが出てきます。2000年に1対角以下だったのが、

07年には2対角を超え、今は3対角に迫るサイズに移行しようとしています。

私たちは他に先駆けて、大きなガラス基板や長尺なフィルム表面へ均一処理工が可能で「低インダクタンスアンテナ (Low-Inductance Antenna: LIA) プラズマ処理装置」を開発しました。これによってプラズマダメージの少ない高密度プラズマを、メートルサイズを超える大面積にわたって生成し、制御できるようになり、大型基板での高品質なプロセスが得られます。

——低インダクタンスアンテナとは？

従来方式のプラズマ源では、高周波電力を供給してプラズマを生成するための電極やアンテナを大きくすることによって装置を単純に大型化しようとする、高周波の伝搬波長と同程度あるいはそれより大型化する場合、高周波電力分布が不均一となり、プラズマ源の大型化ならびに励起電力の高周波数化(短波長化)を妨げる根本的な問題となっていました。さらに、生産のスループットを向上するためにプラズマの高密度化を図るとすると、プラズマの電位揺動が大きくなり、プラズマダメージを引き起こしていました。特に、プラズマの高密度化に有利な誘

導結合型プラズマ源では、アンテナを大型化すると高周波電圧が増大し、プラズマダメージの低減が困難であることが問題となっていました。

独自の視点で開発した低インダクタンスアンテナは、ダメージの原因となるアンテナ電圧の増大を抑制するため、独自の構造によりアンテナを小型化し、インダクタンスを極力低減した高周波誘導結合アンテナで、スループットの向上に不可欠なプラズマ源の高密度化と高品質のプロセスに求められるプラズマの低電位化(ダメージ低減)の同時達成を実現しました。これにより、従来方式より格段に高い成膜速度で結晶化度の高いポリシリコン薄膜作製を実現しました。

——大面積化を可能にする技術は？

複数のアンテナをプラズマ源の適当な位置に配置するマルチアンテナ方式により、任意の形状・大きさのプラズマを生成することを可能にしました。つまり、大面積に対応するために小さなアンテナをたくさん並べたわけですが、小さなアンテナであることのメリットはいろいろあるのです。通常は長いコイルを使った大きなアンテナを用意するのですが、そうすると非常に高い電圧が生じるため、アンテナの位置を高くしたり、巻き方を変えたりします。こちらは極端に短くして並べ、それぞれ複数の高周波増幅器を独立に駆動して統合制御する。従来の方法と比べると、非常識なドン・キホーテ的ないなやり方なのですが、今までにない

ものをつくるのが基本コンセプトです。

——コンビナトリアルプラズマプロセス解析装置とは？

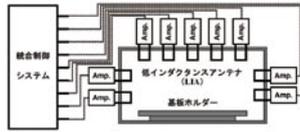
半導体デバイスの更なる微細化と高性能化に向けてナノ加工精度が要求され、プロセス条件はますます狭くなり、ピンポイントでのプロセス条件を試行錯誤的に探索する従来の研究開発手法では限界に達しつつあることが懸念されています。このため、従来の試行錯誤的手法から脱却し、科学に基づいた手法への質的変換を目指して、プロセスの本質を決定するイオンならびにラジカルの密度が基板上に傾斜分布したプラズマを生成し、複数の条件でのプロセス解析を効率的に実現するコンビナトリアルプラズマプロセス解析装置を、科学技術振興機構の戦略的創造研究推進事業(CREST)で開発しています。特に、低インダクタンスアンテナによる低電位(低イオンダメージ)かつ広範囲での密度制御性に優れたプラズマ発生技術と高精度な分布制御技術をもとに、これまでにコンビナトリアルプラズマプロセス解析装置の主体となる傾斜分布プラズマの生成に成功しています。この研究プロジェクトでは、プラズマとの相互作用の解析を通じてソフトウェアの加工を目指しており、次世代の半導体デバイス製造プロセスだけでなく、将来的には、より軽量で安価な新しいデバイスを、プラズマを用いて実現することも夢ではありません。



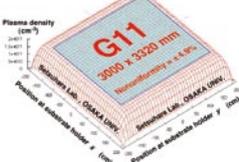
低インダクタンスアンテナ (LIA)



複数のLIAモジュールを装着したプラズマ源



マルチアンテナ方式による独立駆動・統合制御システム



3メートル級の大型基板処理用プラズマ源の設計例

●村本洋子(むらもと ようこ)氏

1933年大阪府生まれ。府立夕陽丘高等女学校を経て、府立天王寺高校卒業。57年大阪大学歯学部卒業。61年に大阪市住吉区で歯科医院を開業、67年より地下鉄あびこ駅に近い現在の場所診療を続ける。学生時代から声楽を習い、シャンソンを中心とするライブ活動を行い、ディナーショーを開催している。

年々歳々おしゃれに華やぐ 「歯科の仕事も歌も楽しくなるばかり」

OG 訪問
村本歯科医院 院長——村本洋子——Yoko Muramoto



大阪大学歯学部創設以来初の女子学生、村本洋子さんの同学年に女子は2人だけだった。旧制高等女学校時代から音楽部に所属し、大学祭ではシューベルトの歌曲を歌った。歌とともに歯科医の仕事が天職と思えるほど大好きになったのは、60歳を超えてからだという。ディナーショーでシャンソンを歌い、遠方からも来られる患者さんを診ながら、「時間を大切にしなければと切に思います」。

歯科医師の村本さんは、戦中・戦後の動乱期に多感な少女時代を過ごした。小学校6年生の半年間、学童集団疎開を経験した。
「食べるものがなくて、真ん丸い顔が帰ってきたら三角形になっていた。朝起きてコーヒーが飲める、おいしいものが食べられる、何て幸せなんやろうと思います。小学生のころから歌が好きだったけど、軍歌ばかり歌わされました。『サンタルチア』を歌ったら、敵国の歌を歌っていると、先生に告げ口されたこともありました」

夕陽丘高等女学校から、男女共学になった新制の天王寺高校に進学した。初恋の彼が阪大医学部を受験すると聞き、「私も」と阪大歯学部へ。両親が歯科医だったので、自然と同じ道に進んだ。創設間もない歯学部には校舎がなく、中之島の医学部の建物で授業を受けた。やがて大正区泉尾の歯学部附属病院で実習するようになった。中之島から泉尾への移動に、皆で市岡から尻無川を渡し船に乗った楽しい思い出もある。
「おしゃれが好きなんです。モンベシかはけない時代を過ごしましたから、

に岸洋子のリサイタルを聴きにいき、いつべんにファンになり、シャンソンを歌うようになった。
「岸洋子さんはセンスがよく、衣装も楽しみでした。阪大ニューズレターの前号で鷺田総長が『ファッションは他人の視線をデコレートすることで、見ている人を喜ばせる』とおっしゃっているのを知り、思わずうれしくなりました」
村本さんは毎年、1000人近い友人・知人の集まるライブで15曲ほど歌っているが、少なくとも3回は着替える。

に審美的な治療が好きで、私の患者さんは女性が多いのですが、皆さん痛くないとおっしゃり、きれいになったと喜んでくださるのがうれしい。自分がされたら嫌なことはしないという方針です。前歯を多数触っても、全部その場できちんと仮歯を作ります。筆先一本で直接仮歯を作っている時には、絵を描いている時と似たような充足感があり『ああこの仕事は、止められへんなあ』と思います。『お酒と人生は、年と共においしくなるなあ』と思う今日この頃です」



▲ディナーショーでシャンソンを歌う村本さん

▼あびこ駅前のあびこ中央商店街で



好きなものを着られるということが夢のように楽しくて。運動会で看護婦さんたちと一緒に競走したとき、みんなトレパンとスック靴だけど、私はスカートにハイヒールで見事一番になりました。高校時代から走るのは得意だったんです。今でも歩くのが速くて、魔女が飛んでいるみたいと言われています(笑) 声楽を習い、阪大時代はシューベルトの「魔王」や「冬の旅」全曲、オペラのカルメンなどクラシックばかり歌っていたが、38歳の時に友達と一緒に

それだけではない、愛犬と散歩するときも、好きな服を着てひらひら裾を翻し、さっそうと歩いていく。
「ディナーショーでは、毎回、歯学部同級生の石沢先生がクラリネットで友情出演して下さったり、高校の同級生が後援会を作って下さったりと、いっぱいお世話になっていきます。素晴らしい方たちに囲まれて、あと10年以上続けたいと思っています。
60歳でディナーショーを始めてから、歯科医の仕事になりました。特



力強くエールを切って 応援団をリード

阪大初の女性団長として、学生生活最後の夏に燃える

● 文学部 4年生
岩井真紀 — Maki Iwai

大学応援団は、体育会系の活動を応援する団体だ。大阪大学ではリーダー部、吹奏部、チアリーダー部から構成されている。大学初の女性応援団長として3部27人のまとめ役を務めてきた文学部4年生の岩井真紀さんに登場してもらおう。



● 岩井真紀(いわい まき)
1988年広島県生まれ。広島市立基町高校卒業。文学部人文学科4年生(日本学専修)。大阪大学応援団に所属し、吹奏部員としてスネアドラムを担当。2009年夏まで、応援団長を務める。

応援団といえは、学ランから連想される「強面」イメージがあるが、岩井

さんは大学に入学するまで、応援団に関して何の知識もなかった。入学式の後、新歓ステージを見たのが最初の出会いだ。スネアドラムを叩くスーツ姿の女性が格好良く、自分もやってみたくて入団した。

現在はドラムで吹奏部を率いると同時に、団長を務める。大阪大学応援団始まって以来初の女性団長として、演舞を締めくくるとエールを切るのは岩井さんの役目だ。

「20年くらい前まで応援団に女子はいなくて、その後も女性には団長は務まらないと思われていたらしいのですが、私が入学したころ、先輩の活躍によって意識が変わってきたと聞いています」
それでも、同期に男子がいない中で次期候補に挙がった時「下の学年に任せてもいいよ」と言うOBもいたという。岩井さんは「私、やります」と言っ

試合では負けることも多いが、団の士気は下がらない。

「形勢不利な時も、こっちの気が下がったらダメ。常にハイテンションです」
試合後は、そのまま打ち上げとなる。今の学生はコンパをしないとというが、応援団は別のようなだ。

「個人的な飲み会はあまりしません。応援団のコンパは昔と変わってません。1年生のころは先輩にハメを外せとよく言われました。盛り上げるのが仕事なんだから」と
現代の応援団は行動を抑制されてい



る。種目や会場によっては、鳴り物禁止、吹奏部も声援を送ることしかできない。豊中キャンパスで深夜に練習すると、周辺から苦情が来る。
もつとハメを外したい、という気持ちがいいつも心のどこかにある。だが日頃はそれを抑えている。だから一番の望みは「やりきること」だ。

全国七大学総合体育大会(七大大戦)が終わる8月末、4年生は引退する。

「私にとっては七大大戦が最後。限界まで声を出し、力をすべて出し切りたい」
就職活動も終え、秋からは卒業論文の制作に取り組む。テーマは「学生とは。かつてはエリートを意味した「学生」という言葉が指す人間像が時代によって変わってきたことに、岩井さん

は関心を抱いている。
昔は大学生の制服だった詰め襟を、応援団員は今も着る。

独特の人間関係も、ある程度受け継がれているようだ。
「下級生に会うと『押忍』。先輩には『こんにちは！失礼します！』。全力を振り絞って挨拶するのが礼儀であり、ルールですね」

初めはなぜそうするのか分からなかったが「こんな世界もあるんだ」と受けとめることにした。「何か意味があるんだろう、と思って続けました。一度ぐらい『体育会してみる』のもいいかと」
高校時代は個人ベースで動く人間だった。活動を通じていろんな人と交流し、みんなでやるのも楽しいな、と思えるようになったことが収穫、と微笑んだ。

HEALTH

健康

「中年期は危険な時？
それとも...?」

保健センター准教授
学生相談室専任カウンセラー
石金 直美 — Naomi Ishikane



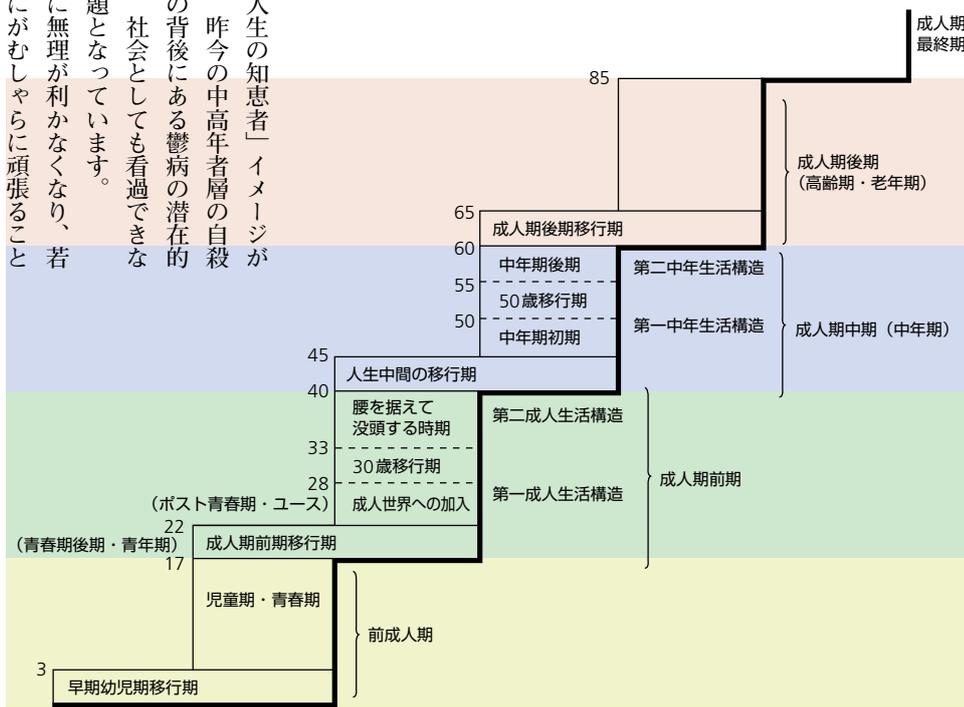
この拙文が皆様の目に触れるのは、次第に秋の気配が色濃くなってくる頃でしょうか。それぞれの季節、その移り変わりには甲乙つけがたい魅力があるのですが、夏から秋への移ろいは、深まる風情と少しの物悲しさで、古来歌心を惹きつけてきました。夏の強い日差しが次第に和らぎ、青空の透明度が増し、田畑は実りの時を迎えます。夏のパワーは衰えるものの、風景は新たに豊かな表情を表し始めます。人生を四季になぞらえるなら、中年期はまさに夏から秋への移行にあたると言えますでしょう。

かつて中年期は「不惑」の時期であり、人生の円熟期と言われてきました。まさに実りの秋のイメージです。思春期危機を乗り越え、大人としての成熟

した力を社会や家庭の中で大いに発揮する成人期を経て、いよいよ中年期。次の世代に引き継いでいくため、力より知恵を体現する年代になります。現役選手を引退し、コーチや監督として後進を教え導き、采配を振るうようになるイメージでしょうか。中年期には、

はできなくなる、今更新たな可能性が花開くとも思えず先が見えた気持ちになる、守るべきものやしらがらみが増えて自由に身動きが取れない感じがする。でも、まだ何かやり遂げられていない、このままでいいのかという思いもある。そんな様々な思いが複雑に行き交うの

▼レヴィンソンによる男性のライフサイクル論 (Levinson, 1978)



出典：岡本祐子 第10章 成人期の発達「教育心理学II 発達と臨床援助の心理学」(下山晴彦編)東京大学出版会 p.266

が中年期なのではないでしょうか。目標に向かって一直線に生きてこられた方ほど、同じ方向に力がかかり続けたゴムがある日ぶつりと切れるように、鬱病に陥りやすいものです。中年期はそうした変化が起こりやすい年代でもあるのです。

精神療法家の神田橋條治氏は、薬物治療によってすっきりと治り難い遷延性の鬱病治療に際して、「失われた人生の回復」という合言葉で「失われた人生の回復」という合言葉を挙げています。「患者さんが人生を(宙に)右上下に線を書きながらこうたどってくるまでに、こっちに行こうと思ったけど、いろんな事情でやめてこっちに歩いてきた」、その生きられなかった人生の中に本人の資質が発露するチャンスがあったのかもしれない「素質が開花するのが途中で頓挫したものを探して、今の生活の中に組み込むと、治る例はかなりある」と述べておられます。

中年期に鬱病の発症が多いのは、ある意味では、今までつくり上げてきた自分の型を破り、失われた可能性を振り返って新たな後半生の生き直しを求め内なる欲求が高まりやすいからなのかもしれません。変化の時はチャンスの時であるとも言えます。そう捉えると中年期は、「失われた人生の回復」を追求し、「自分」を広げるのに適した時期、とても創造的な年代なのかもしれないと思えてきませんか。

Letters & Arts

NOW

・文学・芸術の今を語る

ドイツ／チェコの国境を越える文学研究

文学研究科 教授
三谷 研爾 — Kenji Mitani
E-mail: mitani@et.osaka-u.ac.jp



近年、「英語文学」や「ドイツ語文学」、あるいは「日本語文学」といった言葉を目にすることがあります。「語」の一字のあるなしの違いですが、意味するところは大きく異なります。これらは、英語やドイツ語や日本語で書かれた文学を総称する言い方で、いわゆる国民国家単位で文学をとらえる見地から、意識的に距離をとるものです。

こういふと、ドイツ文学にもスイスやオーストリアの文学が入っているはずだ、という声が上がりがそうです。それはそうなのですが、私が取り組んでいる〈ブラハのドイツ語文学〉になると、事情は簡単ではありません。チェコ首都であるブラハで、主としてユダヤ系の作家たちがドイツ語で展開した文学活動なのです。

中世から20世紀半ばまで、中欧ではドイツ語が汎用言語のひとつでした。主要都市を結ぶドイツ語文化ネットワークを背景に、ドイツ語で執筆する作家も多くあらわれました。なかでも

ブラハは、『変身』の小説家カフカや『マルテの手記』の詩人リルケをはじめ、20世紀の重要な文学者を輩出した街だったのです。こうした現象を把握するには、やはりドイツ語文学という視角が欠かせません。

〈ブラハのドイツ語文学〉の研究が大きく進展したのは、社会主義圏で体制転換がおこった1990年代以降のこと。冷戦時代には、歴史的・文化的概念としての「中欧」じたい封印されており、文献調査や研究交流はたいへん困難でした。そうした状況が根本的に変化した結果、一次資料の発掘と整理、作品の翻訳(たとえばカフカ全集がチェコ語でも読めるようになった)、二次文献の刊行というプロセスが定着しつつあります。



20世紀初頭のブラハ

私もまた、ブラハ、ウィーン、ベルリンで文献収集や実地調査を重ねてきました。20世紀初頭のブラハはハプスブルク帝国の地方都市ながら、チェコ系とドイツ系の住民が激しく対立する民族紛争地であり、また産業博覧会や都市再開発もおこなわれるという、たいへん複雑な状況にありました。多民族都市ならではの社会環境と文学とがどんな相互関係にあるのか、当時の新聞・雑誌・地図・パンフレット類と文学テクストとを照合して考えるというのが、私のテーマ。最近の研究の進展を反映して〈ブラハのドイツ語文学〉の展覧会まで開かれるようになり、そうした成果発信のありようにも目を配らないといけません。

ところで、幾度もチェコに足を運ぶうち、私は関西チェコ／スロバキア協会に入会するようになりました。1961年に大阪で生まれたこの協会の、初代会長を務められたのは当時の阪大総長、赤堀四郎先生です。先生が1930年代にブラハに留学されたことが、会長就任の機縁でした。ブラハ大学と阪大との不思議な縁はその後もつづき、たとえば文学研究科



ブラハ大学日本学科での授業風景

日本語学研究室の教授を務められたネウストプニー先生は、ブラハ大学日本学科が生んだ世界的な研究者です。先年、同じく日本学科のシーコラ先生が懐徳堂研究のため、長期滞在されました。私自身も、2003年の冬学期、ブラハ大学で森鷗外のゼミを担当させていただきました。私自身も、そんな私が夢見ていたできました。そんな私が夢見ていたのは、ブラハ大学と阪大のあいだに本格的な交流関係を作ること。これも、〈ブラハのドイツ語文学〉の船に乗りかかったからこそその夢です。ご関心の向きは、ぜひお声をおかけ下さい。

ブラハのユダヤ人街を舞台にした小説『ゴレム』(1915)の挿絵



国際化拠点整備事業 (グローバル30)採択



平成21年度国際化拠点整備事業 (グローバル30)には、全国から22大学の応募があり、今年度は、国立大学7校、私立大学6校が採択され、本学はその中の1大学として採択されました。

この事業は、わが国の高等教育の国際化を促進することを目的としています。具体的には、英語による授業等の実施体制の構築や、留学生受け入れに関する体制の整備、戦略的な国際連携の推進等によって、日本の大学を国際的な教育研究拠点へ整備する取組を支援するものであり、

それにより、留学生と切磋琢磨する環境のなかで国際的に活躍できる高度な人材を養成することをめざしています。

この事業において、本学では、英語だけで学位が取得できるコースを、学部、大学院にそれぞれ2コース新設し、加えて多数の短期(1~2 semester)交換プログラムを提供することにしています。これによって、留学生に魅力ある教育を提供するとともに、キャンパス全体で国際的な修学環境をつくり、留学生はもちろん、日本人学生も国際化教育を享受

できるようにします。一方、留学生の生活をサポートし、また就職活動を強力に支援するため、サポートオフィスをさらに整備・充実します。宿舎やビザなどの問題に煩わされることなく、将来のキャリアアップをめざして、安心して勉学に打ち込めるようにするためです。

本学ではこれまで、国際化を教育研究理念の一つとして掲げ、その実現に邁進してきました。今回、この国際化拠点整備事業によって、本学の国際化はさらに飛躍的に進展することでしょう。

平成21年度グローバルCOEプログラムに採択

ロボット工学・認知科学・脳科学

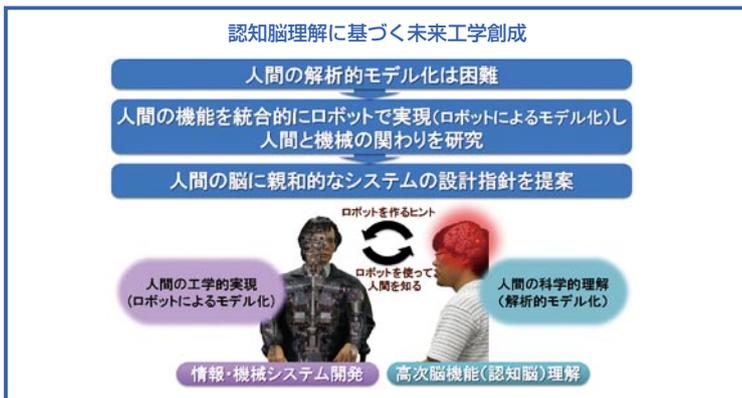
「認知脳理解に基づく未来工学創成」



● 拠点リーダー・基礎工学研究科 教授
石黒 浩 — Hiroshi Ishiguro

本拠点では、医学系研究科と連携機関の国際電気通信基礎技術研究所 (ATR) の脳研究と脳-機械インターフェースを仲介し、人間科学研究科による認知心理学研究と、工学研究科、基礎工学研究科およびATRによる人間指向のロボット研究を結びつけることで、脳の高次機能の理解に基づくロボットを介して人間に親和的な情報・機械システムを創成します。これを「認知脳システム学」と呼び、文理融合型の新たな教育研究分野を確立します。

大阪大学における人間指向のロボット研究は、従来の機械的なロボットの開発ではありません。人間理解に根ざした、人間の知能や発達を理解するための研究です。そこでは、人間と機械の関わりにおける基本問題を扱ってきました。一方、認知科学は、生体情報



測定機器や動作・視線検出装置など新たなツールと共に発展してきましたが、近年ではそのツールとして、ロボットやセンサーネットワークが注目されています。これらの背景のもと、本拠点では、人間理解の研究を展開しながら、人間が適応しやすい、人間に優しい機械システムを実現するためのロボット研究と認知科学が融合した教育・研究を展開します。

そしてこれらに、脳研究を加えることで、認知科学研究が扱う高次脳機能をより精緻に探求するとともに、ロボット研究においても、脳科学・認知科学的知見に基づく、より人間に適応したシステムを実現し、現代社会における問題を解決する未来の工学システムの設計指針を具体的な形で提案していきます。



第41回 大阪大学中之島講座秋季講座のご案内

100年に一度あるかないかの経済不況の中、先人の叡智や最先端研究の成果をもとに、人としての生きる力をあらためてみつめてまいります。そして近未来社会の姿を明らかにし、人としてどう生きていくべきか、さらには科学技術とのよりよい関係を切り開いていきたいとの願いを込めて開講します。

今年度も大阪大学21世紀懐徳堂の主催により、鷲田清一総長、宮原秀夫前総長をはじめとする本学が誇る講師陣が、統一テーマをもとに現代の諸問題について皆様とともに考えていきます。

統一テーマ「近未来とどうつきあうか ～次世代社会の光と影～」

受賞

- 関 達治特任教授(バンコク教育研究センター)
「タイ王国マヒドン大学生物工学名誉博士号」授与
- 西野邦彦准教授(産業科学研究所)
「平成20年度第11回花王研究奨励賞」受賞

Schedule — ◆シンポジウム等

- 大阪大学総合学術博物館第9回企画展
10月1日(木)～12月12日(土)、総合学術博物館待兼山修学館。
問い合わせ先＝総合学術博物館(TEL06-6850-6284)
- 大阪大学フランス語フランス文学会第65回研究会
10月3日(土)、大阪大学待兼山会館。
問い合わせ先＝E-mail: contact@gallia.jp
- 第8回人工呼吸器セミナー
10月10日(土)、千里ライフサイエンスセンター。
問い合わせ先＝医学部附属病院集中治療部・藤野裕士
E-mail: seminar@hp-icu.med.osaka-u.ac.jp
- 5th Congress of Asia Pacific Society for the Study of Aging Male(APSSAM Osaka 2009)
10月15日(木)～18日(日)、大阪国際会議場・リーガロイヤルホテル。
問い合わせ先＝E-mail: apssam2009@uro.med.osaka-u.ac.jp
- セキュア・ネットワークセミナー2009プラス
10月15日(木)～11月12日(木)、大阪大学中之島センター。
問い合わせ先＝財団法人都市活力研究所
「セキュア・ネットワークセミナー2009プラス」事務局
(TEL06-6873-2008、FAX06-6873-2009)
- ベネディクト・ゴリヨ講演会
10月26日(月)、大阪大学待兼山会館。
問い合わせ先＝文学研究科・フランス文学研究室
(TEL/FAX06-6850-5117)
- 第3回「民族紛争の背景に関する地政学的研究」国際シンポジウム
10月31日(土)～11月1日(日)、ブリーゼプラザ。
問い合わせ先＝世界言語研究センター「地政学的研究」プロジェクト事務局
(TEL072-730-5015) E-mail: liccosec@world-lang.osaka-u.ac.jp
- 第3回「民族紛争の背景に関する地政学的研究」公開セミナー
11月3日(火・祝)、大阪大学21世紀懐徳堂。
問い合わせ先＝世界言語研究センター「地政学的研究」プロジェクト事務局
(TEL072-730-5015) E-mail: liccosec@world-lang.osaka-u.ac.jp
- 第22回日本動物実験代替法学会大会
11月13日(金)～15日(日)、医学部銀杏会館。

サブテーマ(A)「人と社会～コミュニケーションとデザイン力～」
サブテーマ(B)「コンピュータ社会における人とロボット」

【開講期間】10月5日(月)～11月25日(水)の間で12回開講。

時間帯は午後6時30分～午後8時。

※11月20日(金)のみ午後3時～午後4時30分。

【会場】大阪大学中之島センター(大阪市北区中之島4-3-53) TEL06(6444)2100

【対象者・定員】対象：一般市民・学生

定員：各サブテーマ別 50名(先着順)

【受付期間】サブテーマ(A)9月14日(月)～9月25日(金)必着

サブテーマ(B)10月16日(金)～10月23日(金)必着

【お問い合わせ・お申し込み先】大阪大学21世紀懐徳堂

中之島講座担当宛(〒560-0043 豊中市待兼山町1-16)

TEL 06(6850)6443 FAX 06(6850)6449

E-mail: info@21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp

詳しくは、大阪大学21世紀懐徳堂ホームページ(<http://21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp>)をご参照ください。Eメールでお申し込みの方は、ホームページから申込書をダウンロードしてください。

問い合わせ先＝大会事務局(TEL06-6879-3172、FAX06-6879-3171)

● 第4回フォトニクスシンポジウム「プラズモンナノフォトニクス(仮)」

11月18日(水)、大手町サンケイプラザホール(東京都)。

問い合わせ先＝フォトニクス先端融合研究センター

(TEL06-6879-7927)

● 大阪大学GCOE「高機能化原子制御製造プロセス教育研究拠点」
第2回国際シンポジウム

11月25日(水)～26日(木)、大阪大学中之島センター。

問い合わせ先＝gcoe-symposium@gcoe.prec.eng.osaka-u.ac.jp

● 第2回阪大・フォトニクス・デイ

11月26日(木)、医学部銀杏会館。

問い合わせ先＝フォトニクス先端融合研究センター

(TEL06-6879-7927)

● 大阪大学イノベーションフェア2009

11月26日(木)、ホテル阪急エキスポパーク。

問い合わせ先＝産学連携推進本部総合企画部

(TEL06-6879-4206、FAX06-6879-4208)

● 産学ビジネスマッチングフェア2009with大阪大学

11月26日(木)～27日(金)、ホテル阪急エキスポパーク。

問い合わせ先＝産学連携推進本部総合企画部

(TEL06-6879-4206、FAX06-6879-4208)

● 第93回国語語彙史研究会

12月5日(土)、大阪大学豊中キャンパス。

問い合わせ先＝国語語彙史研究会事務局

E-mail: cdaeeb@let.osaka-u.ac.jp

● 大阪大学国際高分子シンポジウム(OUMS'09)

12月12日(土)～13日(日)、理学研究科。

問い合わせ先＝理学研究科・佐藤尚弘教授

(TEL/FAX06-6850-5461)

● The 18th Indo-European Colloquium of Japan

12月19日(土)、大阪大学21世紀懐徳堂。

問い合わせ先＝文学研究科・神山孝夫教授

E-mail: kamiyama@let.osaka-u.ac.jp



OSAKA UNIVERSITY

NEWS

TOPICS

wakamaruも参加 天神祭船渡御出航



▲武田佐知子理事、学生たちと北新地のみなさん
▼左から、鷺田清一総長、熊谷信昭元総長、宮原秀夫前総長



今年も天神祭の船渡御に阪大船が出航しました。

阪大船の船出に先立ち、7月10日(金)には、浴衣に身を包んだ本学の学生、教職員42人が、天神祭の本宮である大阪天満宮に参拝し、船渡御の安全祈願及び盛会を祈念しました。

今年は、北新地の元芸妓で日本舞踊西川流師範の西川梅十三さんにご協力いただき、「北新地芸妓稽古場」において、北新地の現役の芸妓の皆さんが総出で学生、教職員に浴衣を着付けていただきました。

北新地から天満宮まで、徒歩で移動の際には、参道を歩く姿に、近隣の方々や参拝に来られた方々も足を止め、大阪大学の取り組みをアピールする絶好の機会となりました。

7月25日(土)、今年で5回目となる阪大船は、水の都大阪をすいすいと、困難な問題も避けることなく力強く荒波をかき分けて邁進することをイメージし「水〜都!大阪大学」を旗印に掲げました。

阪大船には、熊谷信昭、宮原秀夫の歴代総長をはじめ、卒業生、現教職員、育友会の方々、留学生、旧制浪速高等学校、旧制大阪高等学校のそれぞれ代表の方々等総勢172人に加え、21世紀の御迎人形としてコミュニケーションロボット「wakamaru」が「阪大ファミリー」に加わり、大阪大学を大いにアピールしました。

毎年恒例となりました。出船前の船渡御参加4大学(大阪大学、追手門学院大学、関西大学、京都産業大学)代表者によるエールの交換は、京都産業大学の船上で行われ、本学鷺田清一総長と各大学の理事長、学長が互いに挨拶、エールを送りあい、各校オリ



21世紀の御迎人形となった wakamaru



「水〜都!大阪大学」を旗印に掲げた阪大船



船上から望む奉納花火

ジナルの法被を交換するなど、和やかな雰囲気の中、大学間交流を深めました。

船上では、司会進行の落語家の林家染左さん(本学文学部卒業)と御伽衆の清水史子さん(大阪外国語大学卒業)が、天神祭の歴史や行き交う船についてわかりやすく説明しながら、絶妙の掛け合いで乗船客を楽しませてくれました。

また、恒例となった、本学応援団、チャリーダーの演舞と、軽音楽サークルのジャズの調べに、参加者から温かい拍手が送られました。

司馬遼太郎記念学術講演会を開催

6月13日(土)、大阪大学司馬遼太郎記念学術講演会が新装なったサンケイホールブリーゼで開催されました。この講演会は、大阪外国語大学の卒業生である作家の司馬遼太郎氏の業績を偲び、その遺産を継承するため、学生、一般市民を対象として、比較文明的な視点から日本を論じる記念学術

講演会として開催されています。平成19年に大阪大学と大阪外国語大学が統合された後は、大阪大学が事業を引き継ぎ、名称も「大阪大学司馬遼太郎記念学術講演会」として開催するもので、今回で12回を数えます。

第1部では、評論家の松本健一氏と、作家で脚本家の山田太一氏をお招きし、司馬遼太郎の研究を手掛けておられる松本健一氏は「日本の青春と閉塞の時代—『坂の上の雲』にふれて」と題して講演され、続いて山田太一氏が「家族の肖像」と題して講演が行われました。

第2部では、司会に大阪外国語大学の卒業生でもある石野伸子・産経新聞社編集委員を加え、「現代を生きる家族」と題して対談が行われ、家族の在り方について話されました。



家族について語る。(左から)松本健一氏、山田太一氏、石野伸子氏

また、鷺田清一総長は、「大阪大学は学術だけでなく、大阪のさまざまな文化、芸術を守っていく責務を担っており、この講演会は、市民の方々とともに培ってきた伝統があるものである」と挨拶しました。

講演会の内容については、産経新聞の紙面で紹介され、第6回までの講演内容は、『日本文化へのまなざし』(河出書房新社)としてまとめられています。



挨拶をする鷺田清一総長

NEXT ISSUE・No.46

次号は教育について考えます。

「阪大ニュースレター」次号(46号)の特集予告

●大阪大学または阪大ニュースレターへのご意見、お問い合わせがありましたら、Eメールで受け付けております。E-Mail:NEWSLETTER@star.jim.osaka-u.ac.jp

◎阪大ニュースレターは、新聞古紙の再生紙を使用しています。